

# 隣の国と考古学 1 : サハリン

阿子島 香

## [読む館長講座⑤]

東北歴史博物館館長講座概要

2023年8月26日

「東北グローバル考古学 part3—いにしえから、今を考える—」⑤

### はじめに

今年度の館長講座は、宮城県・東北地方と世界の遺跡を比較文化的に捉えて、「温故知新」すなわち現代への意義を探ります。昨年度・一昨年度の講座に引き続いて、「人間とは何か」を大きなテーマに考えます。また、令和3年度、令和4年度とも、各回の講座のあとに、改めて補足加筆を行ないまして、エッセイの形「読む館長講座」に再構成しました。両年度分ともに、当博物館のHP上に、PDFファイルの形で公開しております。どなたでも、自由に無料ダウンロードできますので、どうぞご活用ください。

令和3年度は、人類の誕生から、日本列島へのホモ・サピエンスの渡来、そして縄文時代に至る道まで、「時代を追って」考えてみました。令和4年度は、毎回テーマを変えて、人類史の歩みから「時代を通して」考えてみました。今年度は、歴史から現在にむかって「時代を超えて」考え、当館長独自の視点を含めて、探っていきます。(初めてのお客さま、東北歴史博物館講堂にて、お待ちしております。)

### 隣の近くて遠い国

今回の「隣の国と考古学」という題ですが、相手国との共同研究の実際を紹介することを通じて、どのような意義があり、また難しい点があるのか、考えてみます。今回は1: サハリン、次回は2: 韓国です。いずれの地も、国境となる海を隔てて、すぐ向こう側ですが、日本との関係では、不幸な時代もありました。私は多くの国と研究交流を行なってきましたが、ここでは非常に複雑な歴史的関係がある場所を取り上げます。一時日本領、また旧植民地支配の土地であり、相互の国民感情も複雑で、「近くて遠い国」と表現されたりもします。過去には、当時の日本の学者たちの研究もありました。遺跡は同じ場所に存在し続け、出土品も歴史的な背景の中で収蔵研究されてきました。国境を越えての協力関係によって、一つの国の考古学(「一国考古学」)を超える成果を得ることができます。「比較考古学」の意義です。その一方で、両国の歴史が、いろいろな所に影を落とします。双方にとって、「歴史認識」には、かなりの違いがあるのが現実です。

## 「東北考古学の父」伊東信雄先生

講座の副題は(伊東信雄先生の南樺太調査 1933-1934、ロシアとの国際研究 1998-2017 をめぐって)と長くなりました。これらの両者を対比しながら、一般に私たちの研究行為は大きな歴史の流れの中に存在しているということを、改めて考える機会になればと思います。伊東信雄先生(1908-1987)は、「東北考古学の父」と称されることもありますように、数々の業績で知られています。陸奥国分寺跡、多賀城廃寺跡、多賀城跡などの研究の基礎を築かれたことは皆さんご承知のことですが、東北縄文文化の集落と貝塚、実証的な各時代の編年研究、東北における稲作農耕開始の解明、東北中・南部の古墳文化の解明、多くの城柵官衙遺跡、古代寺院、古代瓦窯跡の研究、古代陸奥国産金遺跡、瑞鳳殿の発掘調査、各自治体での文化財保護体制の構築など、ここで繰り返すまでもありません。ところで、ロシア・サハリン考古学の先駆者でもあったことは、あまり知られていないようです。

## 南樺太の調査

伊東先生は、旧制二高講師となった1933(昭和8)年と翌1934年に、樺太庁の委嘱を受けて、当時日本領であった南樺太に赴き、考古学・民族学の調査を行ないました。若き伊東青年(25-26歳)の単身での樺太調査行は、その後の先生の研究に大きな意義を持ちました。出土品、収集品は、東北帝国大学法文学部の「奥羽史料調査部」に収蔵され、現在の文学研究科考古学研究室に受け継がれ、研究が続けられています。日本国内に収蔵されているサハリン考古学資料としては、有数のコレクションと評価されています。

1933年には、東海岸沿いを北上して栄浜(現スタロドゥフスコエ)の乙名丘遺跡を調査し、最果ての街とされていた敷香(しすか、現ポロナイスク)近郊の最北のアイヌ集落、東タライカで、「アイヌ伝世胴丸式挂甲」というヨロイ2領を収集しました。一領は東北帝国大学、一領は当時の「樺太庁博物館」に収蔵されました。また、南海岸のアニワ湾(亜庭湾)沿岸の遺跡、ススヤ(鈴谷)貝塚、南貝塚(現ソロヴォーフカ)、などを調査しました。(アニワ湾は、日露戦争末期の1905年7月に、日本軍が上陸し樺太の戦いが開始された場所でした)。

1934年には、西海岸沿いを調査して、南端の西能登呂岬(現クリリオン岬)の自主土城、宗仁遺跡群(現クズネツォーボ)、離島の海馬島(現モネロン島)も調査しました。(モネロン島沖は、1983年に、大韓航空機007便が撃墜された場所でした)。西海岸沿いの遺跡調査には、本斗郡(当時)の警察官で考古学を研究していた木村信六氏の案内がありました。真岡町(現ホルムスク)周辺の調査も行いました。(真岡は、1945年8月にソ連軍が上陸した港町で、真岡郵便電信局の女性交換手たちが自決した悲劇があった場所でした)。

## サハリン島の歴史から

サハリン島は、江戸時代後半には日本人(南部に幕領も存在し、東北諸藩から警護もあり)、ロシア人(旧ロシア帝国の南進策)、両者が混在し紛争が起きていました。先住民族はアイ

ヌ、オロッコ（ウィルタ）、ニヴフ（ギリヤーク）が居住していました。1875（明治8）年、「樺太千島交換条約」が締結されて、千島列島（北の占守島まで）と引き換えにロシア領となりました。1905年、日露戦争の講和「ポーツマス条約」により、北緯50度以南が日本に割譲されました。以後、開発が進んで、林業、水産業、製紙業、炭鉱開発などの拠点となり、40万人以上が居住していました。中心都市は南部の豊原（現ユジノサハリンスク）で、ここに樺太庁が置かれ、樺太庁博物館（日本の城郭風の建築で、現在はサハリン州郷土誌博物館）がありました。文学では、宮沢賢治が1923（大正12）年夏に樺太鉄道で旅行し、「銀河鉄道の夜」のモチーフになったとされます。またロシアの劇作家チェーホフは、1890年にサハリン島で全島の流刑囚（政治犯を含む）を独自に調査して、ルポルタージュ『サハリン島』を執筆しました（1895刊行）。ユジノサハリンスクにはチェーホフを記念する博物館があります。

### サハリン国立大学との共同研究

サハリン国立大学のワシレフスキー教授は、1998年から東北大学文学研究科考古学研究室と交流を進めました。2005年には東北大学総合学術博物館の客員教授として滞在し、伊東コレクションの考古資料を詳細に分析する共同研究を実施しました。考古学研究室と同博物館では、2001年にサハリンの伊東先生の遺跡を再調査しました。須藤隆教授、柳田俊雄教授、阿子島の3名が同行しました（須藤2002）。私は1994年、2000年、2001年、2017年に、4度サハリンを訪問する機会があり、共同研究を進めてきました。講座では、1930年代から現在に至る研究の中から、それぞれの時代背景と共に、多くのスライドで紹介しました。

### 伊東先生とワシレフスキー氏

以上、当日配布のレジュメに従って、講演の要旨を述べました。以下に、いくつかのトピックを改めて取り上げて、少し詳しくご説明したいと思います。普通、「国際学術交流」ということは、日常的にはあまりなじみがないかもしれませんが、具体的に細かなエピソードも入れて解説してみます。

ワシレフスキー氏の最初の来訪は、1998年に東北福祉大学の梶原洋教授を通じてのことでした。氏は、英語に堪能ですが、ソ連時代の教育システムが関係していたと語りました。氏はまた旧サハリン教育大学で英語の先生でもありましたが、英語を学ぶ人には歴史学の勉強が義務付けられていて、それは、**マルクス主義の思想堅固**を保障する意味があったそうです。氏の考古学の恩師はゴルベフ教授で、のちに私たちが訪ねたサハリン国立総合大学（Sakhalin State University、またサハリン国立大学ともいう）の発掘調査地点のいくつかも、ゴルベフ教授による調査でした。氏との会話中で、よくゴルベフ先生の名が登場しました。師弟関係を大切にする考え方は、どこか東アジアに通じる気がしました。欧米との交流が多かった私は、ロシア極東人にアジア人の雰囲気も感じましたが、同時にきわめて明確

に「ニェット」(NO!)と言うところは、日本人と違います。話題がそれでしたが、最初に東北大学の研究室に来られた時に、驚きがありました。

今回、行きたいところがある、それは伊東信雄先生のお墓参りである、ということでした。花束を用意して、伊東先生が眠る禅宗寺院にご一緒し、氏は供花をされました。伊東先生の先祖は、**仙台藩の武士の家系**です。伊東家の墓所は、若林区連坊の曹洞宗、栽松院にありました。伊達政宗により1601年に創建の、根白石から移された政宗祖母の位牌寺です。後に、伊東先生が行なった樺太調査(1933—34)の成果は、現在もサハリンで受け継がれていることを知りました。同じ機会に「ダテ・マサムネは、トザマ・ダイミョウですね」(英語で)との質問にまた驚き、日本の歴史を学ぶ英語教師という、お人柄を知りました。その後、長く交流を続けています。

後日、仙台市教委によって継続されていた**仙台北丸の石垣修復工事**の、大規模な発掘調査現場にご案内する機会がありました。氏は大いに興味を示されて、近世の城郭と社会についていろいろ質問をされました。私は英語と日本語対訳版の日本史年表を贈呈しまして、学術交流を深めることができました。また行政機関による大規模な発掘調査に強い印象を持たれたようで、**日本の埋蔵文化財行政の仕組み**について説明しました。氏との最初の出会いの頃を、個人的な感想も含めてお話しましたが、このように国際学術交流といっても各種あり、氏との共同研究のように、研究者同士の個人的信頼に基づく面も大きいということを説明したく思いました。研究機関の公式な会議や派遣ばかりではないのです。

### 東北大学ロシア交流推進室

私は東北大学で、「ロシア交流推進室」の室員に任命されて、多くの同僚たちと共にロシア科学アカデミーとの学術交流に微力ながら尽力していました。考古学者の何人かとは、公式的關係以上の、研究者同士としての個人的交流に発展して、互いの指導学生同士の派遣や、相互の遺跡・資料調査などもあり、実り多い経験を重ねてきました。東北大学による山形県真室川町**丸森 I 遺跡の発掘調査**(2008—2010)に、ロシア人学生も参加するなどです。

しかしながら、ロシアではほぼすべての学術研究は、国家権力の国政の一部です。その国家が隣国ウクライナを軍事侵略した時点で、(報道では「軍事侵攻」と使いますが、英語では一般に *invasion* となっていて、「侵略」の訳が正確と思います)、学術交流を個人的に停止しました。「世界史の歯車を半世紀以上も逆回しした」との私見によります。いわゆる「力による現状変更」は、20世紀後半以降には少なくとも国際法上は、過去の歴史になりつつあると捉えていました。政治と文化芸術は別であるという、たとえば音楽コンクールのような考え方もあります(一例として、仙台国際音楽コンクール2022では、ヴァイオリン部門の堀米審査委員長は、芸術は国籍を問わないことを力強く論じました)。が、科学研究全体がこれほどに国家的体制内で存在している国で、2022年2月の衝撃に直面しては、他の選択肢は考えにくいことでした。戦争が長期化している中で、20年以上にわたって地道に積み上げてきた考古学の有意義な学術交流が断絶している状況には、きわめて複雑な心境が

あります。今回講座で掘り下げている「近くて遠い国」との交流というテーマに、深く関係することですので、蛇足かもしれませんが少し触れました。あくまでも私見ですのでご了承ください。

ソビエト連邦の崩壊（1991）のあと、ロシアは苦難の時期を過ごしましたが、ワシレフスキー氏は、サハリンの場合を話されました。給料は滞り、物価は狂乱し、社会秩序は混沌し、氏は生活のために行商活動などもせざるを得ない状況だったとのこと。しかし一方で、考古学の発掘調査を続け、志望する学生たちも存在して、ユジノサハリンスク（旧豊原）西方の**オゴンキ遺跡群**（旧大豊）の調査を継続しました。2000年に私が伊東先生関係遺跡の予備調査に行った際、同遺跡発掘地点を案内され、黒曜石製石器を拾いました。石材の原産地分析をしましょうと話されました。サハリンの先史遺跡の黒曜石製石器には、北海道からもたらされている原石が多くあります。蛍光エックス線分析などで推定できます。

余談かもしれませんが、1995年に東北大学の西澤潤一総長のリーダーシップでシベリア訪問団の一員（ロシア科学アカデミー・シベリア支部：SBRASの考古学分野）を務めた際、事情通の先生から、忘れずに持参するもの、トイレトペーパー、ミネラルウォーター、そして米ドル少額紙幣というアドバイスを受けました。米ドルは、最小額面の1ドル紙幣をたくさん持参して、実際それが役に立ちましたが、何とも微妙な気持ちでした。

### 総合学術博物館客員教授として

2004年12月から2005年3月にかけて、ワシレフスキー氏を東北大学に招聘することができました。総合学術博物館の柳田俊雄教授の御尽力によるものです。3月5日には文学研究科で講演会を開催しました（「Archaeology of Sakhalin: Current problem of research」）。同博物館ニューズレター「オムニビデンス」15号に紹介があります。

この滞在で、伊東コレクションの樺太資料について、その内容の概略を、現在のサハリン考古学の研究水準で見直すという共同研究を実施することができました。その成果は、英文で公開されています（Vasilevski, Suto, Akoshima, Haneishi, Yanagida, 2006, The list of the Professor of Tohoku University Ito Nobuo's collections, made up in Karafuto-Sakhalin during his personal scientific trip around the Middle and Southern parts of the island in 1933-1934. *Bulletin of the Tohoku University Museum*, vol.5, pp.57-82.）。この研究報告は、東北大学の機関リポジトリ（附属図書館HPから入る）で、どなたも無料ダウンロードできます。整理箱で43箱に及ぶ土器片、石器、動物骨の資料、および片平キャンパスの考古学陳列館（文化財収蔵庫）にある資料の概要が評価、記載されています。

### 学術交流協定の締結

2001年8月には、学術交流協定を締結することができました。長い題名ですが「東北大学大学院文学研究科考古学専攻分野（研究室）とサハリン国立大学人類科学研究所考古学研究室との間における考古学の学術交流に関する協定書」で、8月21日に調印しました。松

本宣郎文学研究科長、須藤隆考古学専攻分野主任、A.アレクサンダー・ワシレフスキー人類科学研究所長兼考古学研究室長が署名しました（スライド）。調印にはサハリン国立大学の学長、ミシコフ氏（写真）も同席されました。何かものものしいご紹介と思われるかもしれませんが、ロシアとの交流を進めるには必須の手続きということになります。相手は国家機関であり、学者同士の自由な研究交流という脈絡ではありません。逆に、このような手順を踏むことによって、各方面の便宜も得られることになります。

私は欧米との交流が長いですが、国際研究の進め方が違うのです。中国との間でも、やや似ている面があります。中国の特質としては、国家・地方組織、研究機関や大学という面の裏側には実は、実力者たちの人脈という、また少し異なった脈絡があって、こちらの個人脈による影響が現実に大きいところがあります。一方、欧米はプロジェクト本位であって多くの財団があり、研究費の獲得と執行という面が強く、原則として国家は露骨には入ってきません。

留学生が行う研究という立場でも、その国での対等な競争関係にあります。私は留学中に、この公平さに感動をしました。アメリカ調査隊の一員として、フランスでのフィールドワークや資料分析を行なって、それなりに評価をしてもらえました。後期旧石器時代のドゥフォール岩陰遺跡の発掘調査と出土資料についての遺跡構造分析および石器使用痕分析を行いました（令和3年度館長講座概要④「氷河時代のハンターたち」、同⑦「地球温暖化の中で」参照）。韓国や香港（2020～2022年以前）では、学术交流は自由ですが、逆に欧米など（あるいは日本）からの外部的な評価が重視されるようです。また韓国では、企業や民間の資金が、かなり弾力性のある執行対象になっているようです。

サハリン大学との協定案文は、東北大学文学研究科の国際交流に造詣の深い先生に多くのアドバイスを受けて、合意をしました。スライドに紹介しますように、かなり総論的な部分もあります。具体的に見てみますと、(1) 研究者の交流を促進、(2) 共同研究を促進、(3) 若手研究者の高度な訓練の支援、(4) 学術資料及び刊行物の交換、などです。「5. 本協定は、日本語およびロシア語により各2通作成するものとし、いずれも等しく正文である」となっていますが、現実には、中間に共通して英語版を作成して、双方でそれを参照して協定締結を進めましたが、英語版は、どこにも出ていません。

国際学术交流にも、「お国柄」があるという面を、ご紹介してみました。このような科学研究を進める際の原則や実際は、実はそれぞれの社会全体の体制や現実の人間関係、社会的規範、文化としての共通の行動様式などとも関係が深く、その中で動いていると理解できるでしょう。深く考えだすと際限がなくなりますが、たとえば日本社会の文化では、集団の和を重んじ、「空気を読み」、断言を避け、コロナ禍の中で見られたように「同調圧力」が顕在化し、集団のウチとソトの区別が強く、社会秩序を重視するなどといった、多くの「日本人論・日本文化論」で論じられているような一般的性格が、また科学研究の場にも表れていると理解できるでしょう。歴史を遡れば、藩政時代まで至るような社会の仕組みとも関係しているでしょう。中国において法的組織と同様にあるいはそれ以上に、「人脈」が重要であ

るという面や、アメリカでの個人の自由と独立を原理とする社会や、ロシア人が生活の中では個人と体制を峻別して考える本音と行動など、さまざまな国際交流の中で、実感してきた面も多くあります。ある意味では、科学研究はニュートラルかどうかという哲学的な命題にも関わってきます。

### 伊東先生関連遺跡の調査

さて、2001年には、須藤隆教授、柳田俊雄教授、阿子島の3名で、念願の伊東先生関連遺跡の再調査（踏査）に赴く機会ができました。立案は須藤教授で、阿子島は2000年に一人で予備的な踏査に行きました。ワシレフスキー氏は「次の偵察に来ましたね」と看破されました。2000年には「総長裁量経費・教育改善推進費・国際交流関係事業」で採用、2001年には福武財団助成を得て、共同研究が可能となりました。関係各位に改めて感謝申し上げます。

サハリン南部のアニワ湾沿岸、南東部半島沿い、西海岸から南端のクリリオン岬周辺の遺跡の踏査を行なって、現状を確認することができました。1945年以降に、ソ連時代に継続的に調査がなされてきた遺跡もあります。ロシアになってからも研究は継続されています。サハリン国立大学の調査資料も、現地に見学することができました。いくつもの遺跡は、伊東先生調査の時代から、重要な地点として研究されていました。たとえば、スサヤ貝塚（また北貝塚ともいいます）は、ロシア連邦史跡として保護されています。サハリン最古の土器型式の標準遺跡とされる乙名丘遺跡を訪ねることもできました。現在は、スタロドゥフスコエ遺跡といえます。地名は栄浜になります。南貝塚は、ソロヴォーフカ貝塚といえます。ここには、チャシもあります（南貝塚チャシ）。

特に重要な成果として、西南端部の**宗仁遺跡群**の現状把握があります。クリリオン岬（西能登呂岬）の突端に近い西海岸に所在します。いくつかの地点があり、宗仁共同牧場地点、宗仁貝塚地点、宗仁沢（川口）地点などです。海沿いの丘陵から沢沿いの平地に至る境に道路と水源地があり、道の切通しの断面で、宗仁式土器を出土する遺物包含層を確認することができました。断面を清掃、写真撮影を行ないました。ここはクズネツォーボ第3・4遺跡の一部で、サハリン大学が調査しています。宗仁貝塚地点も調査が継続的に実施されていました。漁獲物の冷凍倉庫施設のある周囲です。

宗仁共同牧場地点は、サハリン最古の土器文化である宗仁式土器の標識遺跡とされています。栄浜にある乙名丘遺跡（スタロドゥフスコエ遺跡）と共に、サハリン新石器文化の研究にとって重要な遺跡です。角鉢（四角い形で方形平底の鉢形土器）が主で、口縁部に隆線文が施されています。（各遺跡と出土土器はスライドで紹介）。

講座では、主に2000年度の状況を多数のスライドでご紹介しました。この時の概要は、東北大学考古学研究会第38回例会で報告し、阿子島（2003）にまとめてあります。2001年度の成果は、須藤教授が『北方博物館交流』14号（2002）にて紹介されています。

## 東北大学文学部考古学資料図録（1982）

伊東先生の収集資料は、『東北大学文学部考古学資料図録 1・2』（芹沢長介編、1982 刊行）で、北方文化の章の中で、「ソビエト連邦サハリン」として概略を公開していました（スライド）。遺跡名を日本語で記します。図録では、東多来加貝塚、幌千川口、来知志、柏浜、乙名丘、蘭泊、楽磨、ススヤ貝塚、南貝塚、江の浦貝塚、留多加、多蘭泊、荒栗、宗仁の、各遺跡の遺物をあげています。同図録は、私が助手を務めていた時に編集をお手伝いしたもので、伊東先生はロシア語のサハリン地図に、自らピンポイントで、地点はここであると示されました。その時の図が残っていますので、貴重な史料として保管しています。晩年の伊東先生は、また『縄文土器大成 5 続縄文』（1982）に、「樺太の土器文化」として寄稿されています。出土品の写真、遺跡の概要も含まれています。

（サハリンの遺跡現況、出土品の写真多数で説明しましたが、この読む館長講座では、割愛いたします）。

伊東先生が調査した資料は、東北帝国大学法文学部の国史科の中にあつた「奥羽史料調査部」に収蔵されて、現在は文学研究科考古学研究室が保管しています。1924 年（大正 13）には喜田貞吉博士が京都帝国大学教授から、日本古代史と考古学を担当する東北帝国大学講師として着任しました。喜田先生が来た時には、東北大学には考古学の資料はまだ全く無く、まず資料収集から始めたことが記録されています。奥羽史料調査部は、喜田、中村善太郎（西洋史）、古田良一（日本近世史）によって、1925 年に開設されました。

樺太のそれぞれの遺跡は、ワシレフスキー氏（2005）によって、現在のサハリン考古学での遺跡名（当然ロシア語です）と所在地とに対照されて、日本、ソ連、ロシアの各時代の調査資料はつながりました。ついでですが、遺跡名称（地名）が変わっていないところもあります。「ススヤ」（鈴谷）は、現在も Susuya、そして日本領となるよりも前にその場所はススヤでした。チャーホフの『サハリン島』（1895）に同じ地名で出ています（岩波文庫版山田訳 1953、上巻 270 ページ）。亜庭湾は、1890 年にはアニーワと呼ばれていたのと同様です。サハリンの地名は、先住民族の言葉由来、日本語、ロシア語が錯綜していて、この島がたどった複雑な歴史を物語っています。

## 人種論・民族論から文化編年への転換

伊東先生は、樺太の土器文化の編年を行ないました。古い型式から新しい型式の順に並べることを「編年」といいます。考古学の基本的な方法論です。1930 年代は、日本考古学にとって研究方法に大きな変化が訪れた時期でした。明治時代から大正時代へと、日本列島での考古学研究は進展しましたが、編年学が確立する前は、「人種論・民族論」の時代と言われる。いろいろな先史文化、古代文化を、どの民族が残したものかを重視して研究するという考え方でした。鳥居龍蔵による「日本石器時代人アイヌ説」などが代表的です。

考古学の大きな転換をリードしたのは、山内清男（やまのうち すがお）氏でした。東北帝大の医学部の副手をしていて、小規模ながら「層位的な発掘調査」を進めて、縄文土器の



全国編年の基礎を築いたのです。1939年（昭和14）に増補新版として刊行された『日本遠古之文化』は、学史上の画期となった業績とされています。伊東先生は、山内先生に直接師事して、当時は最先端の方法論であった層位的発掘を学び、その方法論を単身調査に赴いた樺太で実地に適用したと、このように位置づけられます。山内先生にしたがって、七ヶ浜町大木圀貝塚、柴田町槻木貝塚など、いくつもの遺跡で発掘を行ないました。

伊東（1942）「樺太先史土器編年試論」は、『喜田博士追悼記念 国史論集』に掲載されている論文です。古い順に、宗仁式、遠淵式、鈴谷式、十和田式、江の浦B式、江の浦A式、南貝塚式、東多来加式、内耳土器という型式編年を行ないました。東北大学附属図書館の「伊東文庫」本には、たくさんの書き込みが残されています。ワシレフスキー氏によれば、現在のサハリン考古学でも、伊東編年の骨子は受け継がれているということです。時代と国を超えての学問の継承という意味で、感慨深いものがあります。

### ワイルドな大自然とフィールドワーク

現在もサハリンには大自然が健在で、フィールドワークにも相当な力量が必要です。日本での発掘調査とは大分違うところがあります。私たちは、サハリン国立大学のご協力のお蔭で、何とか研究を進めることができたという実感があります。まず、道路事情が大変です。幹線道路は広くて整備されていますが、多くの道は未舗装、地域によっては寸断されている状況があります。2000年に訪問して宗仁遺跡群まで行った際、出発前に四輪駆動車（パジェロ）のタイヤを幅広仕様に履き替えました。ラジエータ周辺の空気取り入れ口は、高い位置になるよう改造されていました。

ユジノサハリンスクから西に山越えでネヴェリスク、海岸沿いを南下してシェブニーノ、その先は寸断された道を走り、草原のワダチに沿って走り、クズネツォーボ遺跡群、さらに半島南端まで走り、クリリオン岬の軍事基地へと至りました。日本時代の地名では、それぞれ、豊原市、本斗町、南名好、宗仁遺跡群、西能登呂岬の基地となります（衛星画像で説明）。橋が架かっていない川は、浅瀬を渡河します。先導者が水中を歩き、探り棒で川底を確認し、ゆっくりと進みました。これには驚きましたが、ごく通常の方法のようでした。雨が降れば、場所によって、道路は泥濘となります。隊員がすばやく降りて、後ろから押し対処します。

海岸でキャンプするのもごく普通で、ここの沢水は良い水で飲めるとか（沸かしてから飲む）、細かく知っていて（宗に遺跡群では、長期的にフィールドワークをされている）、いちいちご紹介できないほど細かく、フィールドワークに熟練しています。私はアメリカ西部、大平原地域（グレート・プレーンズ）やロッキー山脈地域の、ワイオミング州で研究していた頃、かなりの期間、キャンプ生活でのフィールドワークを経験していましたが（30代のころ）、それでもロシア隊のようすには、驚くことも多くありました。隊員が海に潜っていて、カニをたくさん取り、その晩の食事とか、その場でサケを加工して、山のような量のイクラとか。ワシレフスキー氏の曰く、「タラバガニやイクラは日本人の好物デス、沢山ドウゾ」といった具合でした。

2000年にロシア側で発行のサハリン観光案内パンフレットを見ると、サハリンの魅力について、日本語でPRしてあります。要するに、手つかずの大自然が健在である、オフロード走行の経験はいかが、夏も冬も自然の豊かさを満喫できる場所へ、いらっしやい、のような表現です。この頃、ロシアとは雪解けムードがあって、相互交流の雰囲気盛り上がっていた時期です。考古学でも、多くの研究者が、サハリンを研究するならチャンス、といった雰囲気があり（失礼しました）、調査に行きました。確かに豊かな大自然には間違いありませんが、土地の魅力については、「モノは言いよう」という感じですね。シベリアや極東のフィールドでは、普通の四輪駆動車では能力が不足するらしく、発掘調査隊では旧ソ連製の軍用トラックで、全輪駆動（六輪駆動車はちょっとだけ経験しました）のゴツイ車両が使われます。燃料の消費量がすごいそうです。

### 軍事的な要衝の地

宗に遺跡群よりさらに南、クリリオン岬には、重要な軍事基地があるので、外国人の立ち入りは厳しく制限されています。この周辺の西方海域で、1983年9月1日に、大韓航空機（KAL007便）が撃墜された事件がおきました。ニューヨークからアンカレッジ経由ソウル行きの便が、予定航空路をはずれて、日本人も多数が犠牲になった事件でした。私が持っているアメリカ空軍の航空地図（市販品）を見ると、この周辺は危険、撃墜される恐れもある、と書いてありました。

2000年9月の予備調査で、クリリオン岬の北西約2kmに所在する自主土城を踏査することができました（スライド）。海岸の段丘に面して、南東、北東、北西の三方を百メートル強もある土塁に囲まれ、土塁の外側に接して大溝が巡り、南西は海岸に向いて傾斜し開いている土城です。土塁の中央部には、切れ目があって、門跡と推定されます。伊東先生がかつて先駆的な調査を行なった地です（1936「樺太における支那式土城」『文化』3-1）。12～13世紀ころの中国大陸勢力（金あるいは元）が関与したと考えられるなど、諸説があります。1990年代から断続的に、国際調査も行われています。

ワシレフスキー氏は、前もって管区の役所（ネヴェリスク）に立ち入り許可を申請、取得済みでした。なお念を入れて軍のレーダー基地に出頭（「お前は車の中で待っている。誰かが来ても慎重に振る舞え」）して、しばらく経って戻り、司令部の即時退去命令なので、速やかに帰となりました。帰路の短時間でしたが、海岸でキャンプする前に、自主土城の遺跡に立ち、伊東先生を追憶しました。夏の夕方、季節がら、蚊の大群の襲来を経験しました。

### 宗仁式土器の古さ

サハリン新石器文化の最古とされる土器型式、宗仁式の年代観には、いくつかの説がありました。古く考えると、相対編年で最古であること、隆線文土器・無文土器が主体であること、両面加工の石斧を伴うこと、刃部の部分磨製石斧もあることなどから、縄文時代草創期

と関連する可能性も考えられたことがあります。ワシレフスキー氏の 2005 年の講演では、宗仁式は 7200～6200BP とされていました。なお遠淵式は BC5～BC3 世紀、ススヤ式は BC5～AD6 世紀とされていました。

東京大学の福田正宏氏ほかと、宗仁式土器の年代測定を行いました（福田ほか 2012）。宗仁共同牧場遺跡から出土した宗仁式土器破片に付着している炭化物を、高精度の放射性炭素年代測定したものです。口縁部破片の外側と内側から炭化物を採取しました。また乙名丘遺跡の角鉢の底部からの試料も測定しました。9 試料の測定値はよく一致していて、較正年代で約 8000 年前から 7500 年前の範囲となりました。

### チャーホフ・サハリン島文学記念館

ユジノサハリンスクの中心部に、チャーホフを記念する博物館があります。ロシアを代表する文学者の一人として、戯曲、短編小説に優れ、日本でも人気が高い作家です。四大戯曲とされる「かもめ」「ワーニャ伯父さん」「三人姉妹」「桜の園」は演劇の題目として、プロ・アマを問わず公演も多く行われてきました。仙台文学館の初代館長、故井上ひさし氏は、チャーホフを高く評価しています。

そのアントン・チャーホフは、実はサハリンに深い縁があり、現地では敬愛される偉人となっています。1890 年のこと、30 歳だったチャーホフは、単身シベリアを横断し、帝政ロシアでは「流刑の島」であったサハリン島を訪れて、全島の流刑囚についてのルポルタージュを著しました。1895 年に出版された『サハリン島』は、当時のサハリンの実情を記した貴重な記録文学とされています。何通りかの邦訳がありますが、私が参照したのは 1953 年中村融氏の翻訳で、岩波文庫版です。伊東先生の関連遺跡が立地する集落についても、何か所かに記述があり、地名、地形、村落の位置など、日本領となる以前の情報として貴重です。

全島各地をめぐる旅では、7000 枚以上ともされる独自のカードが作られました。村々の実態が克明に記載されていて、アイヌなど先住民族についても書かれています。囚人たちが村落に定住して開拓しているようす、時に悲惨な状況が述べられます。この旅が、政府や行政とは別の、文学者としての個人的な動機から実行された経緯は、さまざまに論じられてきました。シベリア鉄道は、まだ開通していない時代でした。舟と馬車で 4 か月もかかって、サハリン島に到着しました。若きチャーホフの文学的転機とされる旅でした。

公園にある『サハリン島』の書物をかたどった記念碑です（スライド）。サハリン島の多くの場所に、チャーホフゆかりの地が記念されているということです。「チャーホフ・サハリン島文学記念館」は、1995 年に開館し、2013 年に移転改装しました。2017 年のスヤング国際会議の際に訪問の機会がありましたので、少し紹介します。流刑囚たちの状況の復元ジオラマ、炭鉱での労働のようす、開拓家族として丸太小屋で暮らすようす、などが展示されています。

## 宮沢賢治と樺太

宮沢賢治の名作『**銀河鉄道の夜**』は、銀河系の中を旅する列車にさまざまな乗客が乗り降りしていく、ジョバンニとカムパネルラの物語です。この銀河鉄道のモデルとされる一つが、サハリン南部の豊原から栄浜に至る路線を走っていた「**樺太鉄道**」です。もう一つのモデルは、花巻から釜石へ向かう岩手軽便鉄道とされます。物語には「白鳥駅」が登場します。（ちなみに白鳥座は天の川の中にあり、主星はデネブで、北十字星ともいいます）。この付近が伊東先生のゆかりの遺跡と関係がある場所ということが分かりましたので、少し紹介いたします。

花巻農学校教員の時代、1923年（大正12）、26歳の夏に、7月31日（花巻発）から8月12日にかけて、賢治は樺太旅行をしました。最愛の妹トシの死後、汽車で「サガレン」（当時のサハリンの呼称）に旅立ちました。1922年1月にトシが亡くなり、トシの魂の行方を追い求める旅であったとの通説があります。公式には、教え子の就職を依頼に王子製紙勤務の友人に会うためとされます。1923年5月に、稚内航路の連絡船（稚内一大泊）が、鉄道省により開設された年でした。

梯久美子氏（2020）『サガレン 境界を旅する』に、「栄浜」と「豊原」間の、賢治の乗車日時の記事があります。1923年8月4日、栄浜駅を午後4時35分に乗車する列車で、賢治は豊原（ユジノサハリンスク）に向かいました。栄浜は、スタロドゥフスコエで、ここに伊東先生の**乙名丘遺跡**がありました。東海岸です。2001年に踏査した際には、廃線となっていた鉄道線路の周辺に、乙名丘遺跡の場所を確認しました。遺跡はサハリン国立大学が継続して発掘調査していて、残念ながら伊東先生の遺跡地点は正確には判明していません。先述の宗仁式土器を出土した下層と、オホーツク文化の竪穴遺構がある重層遺跡でした。現在も、草やぶの中に、竪穴住居跡が群集して地表に残存し、窪地になっている場所があります。

東北大学考古学研究室に、当時の陸地測量部作成の旧樺太地形図（25000分の1）が残っていますが、「**白鳥湖**」図幅の部分を見てみましょう。昭和6年陸軍航空本部撮影とあります。オホーツク海、樺太鉄道、東京帝国大学演習林などが見えます（スライド）。栄浜と豊原の間には、落合（現ドーリンスク）という町があって、旧ソ連時代には製紙工場が操業していました。1994年の段階で木造施設が残存していたということです。その製紙工場は、実は王子製紙の拠点工場だったらしく、インフラをソ連が接収して使用していた状況が知られます。以上、賢治の物語や遺跡の現状など、かなりの細部に及ぶトピックですみませんが、当時の日本人が持っていたであろう、北の遙かな土地としての樺太のイメージが分かるので、少しお話ししたところです。

## 最果てのアイヌ集落と伝世のヨロイ

さて、伊東先生は1933年に、東海岸を北上して、東多来加という場所に来ました。ここには貝塚がありました。最果ての北の街というイメージを持たれていた、敷香（しすか、現ポロナイスク）の東になります。そこにはオタスの杜という場所、最北のアイヌ集落があり

ました。東多来加で、伊東先生は東万吉という女性に会いました。男の名を持つ女性ですが、前夫の名を引き継いだ可能性を考えています（末永・伊東 1979『挂甲の系譜』）。その人物の家には2領のヨロイが伝世されていて、「胴丸式挂甲」という古い型式でした。鎧櫃もありました。挂甲は、多数の革製の小さな小札（こざね）を綴じ合わせて、胴の前で合わせる型式のヨロイです。伊東先生は1領を買い受け、もう1領は後に樺太庁博物館に譲ってほしいと交渉しました。

（スライドでヨロイ2領の細部も紹介）。東北大学に1領は収蔵されています。もう1領については、長く不明になっていました。1994年にサハリン州郷土博物館（ユジノサハリンスク）で、このヨロイを確認しました。それは重要な資料として展示されていました。樺太1945年地上戦と戦後の混乱、博物館のソビエト連邦化、冷戦時代、新調査の時代を経た中でも、貴重な資料として継承されていたことに、感動を覚えました。帰国後の大学報告会にて強調をしました。『挂甲の系譜』所載のアイヌ人による着用姿と同一の写真も、そこに展示されていました。ヨロイの胸板には、三つ巴（みつどもえ）が赤彩漆で描かれています。脇板には、菱形の紋が描かれています。

**サハリン州郷土博物館**は、ユジノサハリンスク中心部にあって、旧日本時代に建てられた城郭風の建築です。現在も改装されて継承されています。2017年に再訪した折に、リニューアルオープンしていた新展示を見ました。2004年のリニューアルとのことです。民族学の資料には、旧日本時代の収集資料が多く見られます。考古学の資料には、旧ソ連時代から継続調査されている成果がよく表れていました。アイヌのヨロイは、新展示でも重要な民族資料として、アイヌ民族文化の解説、着用した古写真パネルと共に、新しいケースの中で存在感を示していました。何度もの戦争状態（両国は、ロシア革命直後のシベリア出兵でも戦っています、第二次大戦終戦後の57万人というシベリア抑留もありました）、両国間での所蔵替えを経ても、学術的価値を認め保存継承するという、同じ学問を進める学者たちの気持ちが伝わってきたことです。

## 戦争の記憶

サハリン南部の北緯50度以南の地は、1905年のポーツマス条約で、日本に割譲されました。以後日本領として開発が急速に進行しました。1905年の歴史を知る場所を紹介します。日露戦争の末期、連合艦隊とバルチック艦隊との日本海海戦（1905年5月27日 - 28日）の後に、日本軍が樺太に上陸作戦を敢行しました。7月7日から31日のロシア軍降伏までの「樺太作戦」と呼ばれます。これは、来たる講和条約を有利に運ぶためとされています。

日本軍の上陸地点は、亜庭湾沿岸の女麗（メレイ）というところで、記念碑が立っていましたが途中で折れています（スライド）。倒壊した部分に「上陸」「中将」などの文字が読めます。近くに別の倒壊石碑があって「忠霊塔」と見えます。2017年のスヤング国際会議で主催のワシレフスキー氏が、遺跡見学の際に案内してくれたようすです。

眺望の良い場所で、東方には液化天然ガス LNG の国際巨大プロジェクト「サハリンⅡ」のプラントと積み出し港が遠望されます。望遠で撮影できました（スライド）。北サハリンのノグリキ沖から、パイプラインでサハリンを縦断し、ここまで来ている終点にあたり、日本など海外向けに積みだされる場所です。

サハリン州郷土博物館の新展示、近現代室には、北緯 50 度に設置されていた「境界石」がありました。石の南側には菊の御紋章と日本語で大日本帝国、石の北側には双頭の鷲の紋章とロシア語でロシアと刻まれています。展示ケースには当時の小銃も入っています。三八式歩兵銃です。このような実物を見ますと、ここは歴史の流れの中で何が起きた土地かということを実感してしまいます。博物館とは、実物をして歴史を知らしめる場所でもあります。

南樺太は、「近くて遠い国」との関係を考えるのに、多くの歴史を教えてくれる土地です。帝政ロシアと幕末日本とのせめぎ合いの時期、ロシア領となつての流刑地の島、チーフの旅、日露戦争の樺太作戦、大日本帝国の北の新開発地、突然のソ連参戦と引き揚げの悲劇、鉄のカーテンの冷戦時代、ソ連崩壊後の交流、などを見て参りました。

その歴史を通じて、国際関係と学問との両方を合わせて考えていく機会になれば幸いです。今回の「読む館長講座」では、日常生活ではあまり機会がないと思われる国際学術交流の実際につきまして、いろいろな細かなエピソードも交えてご紹介してみました。

ご清聴まことに有難うございました（最後までお読みいただき、有難うございました）。

（本稿は、講座レジュメと講演内容に補足して加筆したものです。なお参考文献は、日本語のものから選択していますが、今回は、入手困難な文献を含むこと、ご容赦ください）。

## 参考文献

阿子島香（2003）「サハリン南部・宗仁遺跡とその周辺」『考古学の方法』4、43－47 頁、東北大学文学部考古学研究会。

伊東信雄（1935）「樺太石器時代概観」『ドルメン』4－6、109－113 頁。

伊東信雄（1936）「樺太に於ける支那式土城」『文化』3－1、34－47 頁。

伊東信雄（1937）「樺太出土の縄文土器」『文化』4－3、99－108 頁。

伊東信雄（1942）「樺太先史土器編年試論」『喜田貞吉博士追悼記念 国史論集』所収。

伊東信雄（1982）「樺太の土器文化」『縄文土器大成 5 続縄文』所収、講談社。

末永雅雄・伊東信雄（1979）『挂甲の系譜』雄山閣。

須藤隆（2002）「東北大学考古学研究室によるサハリン南部先史遺跡の予備調査」『北方博物館交流』14、巻頭言。

芹沢長介編（1982）『東北大学文学部考古学資料図録』1・2。

新岡武彦・宇田川洋（1990）『サハリン南部の遺跡』北海道出版企画センター。

福田正宏・阿子島香・國木田大・吉田邦夫（2012）「宗仁式土器の再検討：伊東信雄コレクションの型式と年代」『Bulletin of the Tohoku University Museum』11、201－208 頁。

チャーホフ、アントン（1895）、中村融訳（1953）『サハリン島』上巻・下巻、岩波文庫。  
ヴァシリエフスキー、A.A.（1992）「サハリン島の新石器文化（概説）」木村英明訳『北海道  
考古学』28、115-136。